



令和5年度

千代田学報告書

千代田区から発信するサステナブルファッションの
「自分ごと化」

2024.Feb.

好きを着こなす 未来の自分に会いに行く

共立女子大学 家政学部 被服学科

目次

1 はじめに	p.1
2 取り組みの概要	p.2
3 講演会	
3.1 企画説明	p.4
3.2 講演 地域性の復権による衣服の高付加価値化	p.5
4 展示	p.7
5 ワークショップ	p.14
6 アンケート分析	p.16

1. はじめに

ファッション産業は全産業の中で 2 番目に水を消費し、世界の地球温暖化ガスの約 10%を排出する環境負荷の大きい産業である。持続可能な開発目標 SDGs の達成を目指す機運が全世界的に高まっている中、日本では経済産業省・環境省・消費者庁等の省庁でもファッション産業の現状認識と分析が進められ、企業でもサステナブルファッションを推進する連合が発足する等の活動が活発化している。

一方、企業の活動は利潤追求という軛から逃れることはできず、サステナビリティと経済性の両立を実現するためには企業の努力だけでは限界がある。大量消費と大量廃棄を助長するファストファッションを否定し、本当の意味でのサステナブルな衣類を適正な価格で購入して長く使用するような消費者意識の変化が必要である。

共立女子大学家政学部被服学科では、これまで環境負荷の低い草木染めを用いたドレス作品の制作や、織物産地から発生する廃棄物からアクセサリを制作するアップサイクル活動など SDGs の達成に資する研究・教育活動を行なってきた。本事業では、千代田区の居住者、在勤者、在学者（以下「区民」という）にサステナブルファッションを「自分ごと」として捉えていただく啓蒙活動を実施し、その効果を検証した上で、千代田区からSDGs推進の一助となる情報発信・提案を行うものである。



図1. 草木染めドレスによるファッションショー

2019.11.12

共立女子大学

研究代表者

村瀬 浩貴

共立女子大学 家政学部 被服学科 教授

研究者・協力者

宮武 恵子

共立女子大学 家政学部 被服学科 教授

加藤 裕子

共立女子大学 家政学部 被服学科 助手

安藤 美沙子

共立女子大学 家政学部 被服学科 助手

2. 取り組みの概要

本学を会場として、講演会とワークショップを企画した。講演会には、山梨県立大学の増田貴史特任教授をお招きすることにした。増田氏は、常温で染色可能な革新的植物由来染料を開発し、その技術を利用して地域創生にも取り組んでいる気鋭の研究者である。図1に示したファッションショーで披露したドレスは全て増田氏の革新的染料で染色したものである。増田氏の最新の活動について講演いただくことにした。

さらに、本学の宮武恵子教授より、さまざまな不要物を服やアクセサリーにアップサイクルした事例を現物展示とともに紹介した。そして、織物を製造する過程で発生する廃棄物「捨て耳」を、キーホルダーやイヤリングに参加者自身でアップサイクルするワークショップを開催した。

「千代田区で学ぶサステナブルファッション」
2024年8月8日(火) 13:00-16:30

プログラム

(第1部 講演会) 会場とオンラインのハイブリッド開催
13:00 講演会の趣旨説明
共立女子大学家政学部被服学科 教授 村瀬 浩貴

13:20 講演会 「地域性の復権による衣服の高付加価値化」
山梨県立大学 地域人材養成センター 特任教授 増田 貴史

(第2部 展示・ワークショップ) 会場来場者のみ。定員 25 名
14:20 暮らしに役立つアップサイクルファッションの紹介
共立女子大学家政学部被服学科 教授 宮武 恵子

15:00 アップサイクル作品展示紹介

15:20 ワークショップ (A コース キラキラ・イヤリング B コース
モケモケ・キーホルダー)

会場
共立女子大学 本館 508 教室 (講演会)
本館 518 教室・ラウンジ (展示・ワークショップ)
住所: 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1

参加費 無料

対象
千代田区民および千代田区への通勤・通学者

令和5年度「千代田学」事業 「千代田区から発信するサステナブルファッションの自分ごと化」
千代田区で学ぶサステナブルファッション

千代田区で学ぶサステナブルファッション

日時 2023年8月8日(火) 13:00～16:30
場所 共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス 本館5階
※参加費は無料です。

1 講演会 本館5階508	2 展示・ワークショップ 本館5階518・ラウンジ
講演会 13:00～ 講演会の趣旨説明 共立女子大学家政学部被服学科 教授 村瀬 浩貴 13:20～ 「地域性の復権による衣服の高付加価値化」 山梨県立大学 地域人材養成センター 特任教授 増田 貴史 14:20～ 「暮らしに役立つアップサイクルファッションの紹介」 共立女子大学家政学部被服学科 教授 宮武 恵子	ワークショップ 15:00～ 2023アップサイクル作品展示 15:30～16:30 ワークショップ A. キラキラ・イヤリング B. モケモケ・キーホルダー 定員 25名。お一人から申込みできます。 A/Bどちらかを選択してください。 1グループ3名程度を予定

千代田区で学ぶサステナブルファッション

ファッション産業は全産業の中で2番目に水を消費し、世界の地球温暖化ガスの約10%を排出する環境負荷の大きい産業と言われています。持続可能な開発目標SDGsの達成を目指す機運が全世界的に高まっている中、日本でも省庁においてファッション産業の現状認識と分析が進められ、サステナブルファッションを推進する企業連合が発足する等の活動が活発化しています。一方、ひとりの消費者としてどのような行動をとるべきなのか、またその答えは明確ではないように思います。環境に配慮した生活もしなければ、お洒落も楽しめない、多くのの方がそのような思いを持っているのではないのでしょうか。共立女子大学家政学部被服学科では、環境負荷の低い草木染を用いたドレス作品の制作や、繊維産地から発生する廃棄物からアクセサリーを制作するアップサイクル活動など、SDGsの達成に資する研究・教育活動を行ってきました。今回、千代田区のご協力を得て私たちのサステナブルファッションに関する取り組みをご紹介します講演会とワークショップを企画いたしました。環境に配慮しながらファッションも楽しむ衣生活の参考になれば幸いです。

1 講演会「地域性の復権による衣服の高付加価値化」13:00～
山梨県立大学 地域人材養成センター 特任教授 増田 貴史
本来に多い衣服、豊かな衣服とは何か、ここではその答えの1つとして「衣服における地域性の復権」を考える。例えば石川県なら「兼六園様で染めた加賀友禅を着て兼六園にお花見に行くこと」や、山梨県なら「甲州ワインで染めたドレスを着てワインパーティーに参加すること」といった衣服を介した地域性と体験の接続が今までの社会にはない豊かさや社会価値を実現する。つまり技術だけでなく、その地域を支えてきた人・自然・文化・産業（例えば兼六園、加賀友禅、アヲノ境、山梨ワイン文化）があるからこそ成立する。その地域固有の豊かさを備えた衣服が生活を豊かにする。一方で環境面に着目すると、必然的に地域素材を用いた天然染料や天然繊維が好まれるため環境負荷の低いモノづくりに向かうことになる。大事なのは低環境負荷なことが豊かさに繋がるのではなく、地域の豊かさを備えた衣服を求めると低環境負荷なものが必然になる、ということである。本講演では、その実現のための必要な科学技術の開発とその社会実装、共立女子大学との連携活動、新ブランドの立ち上げ、地域共創の取り組みなどを紹介する。

2 展示・ワークショップ「暮らしに役立つアップサイクルファッションの紹介」14:20～
共立女子大学家政学部被服学科 教授 宮武 恵子
2023アップサイクル作品展示 15:00～
廃棄されてしまうジーンズ等の衣料品、やぶ草になってしまいうれり切れたシャツに、山梨県産内産地の「捨て耳」や、廃棄されるバルクから製作した色材などを使ってコラージュし、新しい価値を創出しています。未来に向けての循環するファッション「社会へとつながる、メッセージを込めた作品をご覧ください。」
ワークショップ 15:30～
定員 25名。お一人から申込みできます。A/Bどちらかを選択してください。1グループ3名程度を予定
A. キラキラ・イヤリング
金糸や銀糸が入った「捨て耳」は、キラキラ輝いて綺麗です。小さくまとめて可愛らしいイヤリングを制作してください。
B. モケモケ・キーホルダー
「捨て耳」は、色々なカラーがあります。好きな色を選んでいただき、モケモケの胴体部分を制作します。またお好みの色を選んで、目の位置も工夫しながら、あなただけのオリジナルモケモケキーホルダーを制作してください。

アクセス
東京・千代田半蔵門線・新大塚駅三田線・新大塚駅新大塚線
「神保町」駅下車 A8出口から徒歩1分
東京・千代田東西線・半蔵門線・新大塚駅三田線・新大塚駅新大塚線
「九段下」駅下車 6番出口から徒歩5分
「竹橋」駅下車 1b出口から徒歩3分
申し込み方法
千代田学講演会、展示・ワークショップともに申し込みが必要です。QRコードにアクセスし、申し込みをお願いします。
申し込み期限: 2023年7月25日(火)
申し込み QRコード
問い合わせ先
共立女子大学家政学部被服学科 教授 村瀬 浩貴
hmurase@yortsu-wu.ac.jp

図2. 講演会・ワークショップのフライヤー

■事前告知

図2に示すフライヤーを作成し、千代田区役所および近隣の児童館に設置した。各所への配布枚数は以下である。

設置場所	枚数
千代田区役所	200
西神田児童センター	30
神田児童館	30
一番町児童館	30
富士見わんぱく広場	30
いずみこどもプラザ	30

また、本学のホームページおよびTwitter（現X）、Facebookでの告知もおこなった。

■参加者の結果

講演会参加者: 32名

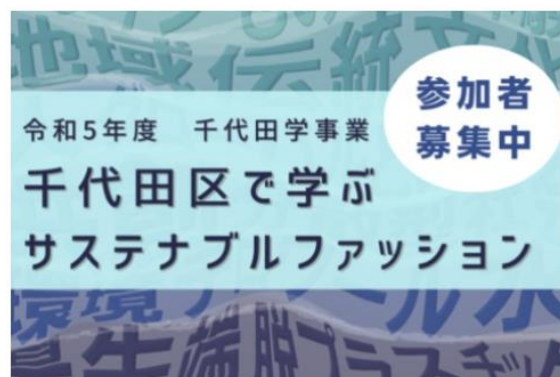
ワークショップ参加者: 19名



講演会会場 本館508教室



ワークショップ会場 本館518教室



イベント

【千代田学】参加者募集：8/8
（火）開催 千代田区で学ぶサステナブルファッション

－ 2023.07.10

図3. 本学ホームページでの開催告知



展示会場 本館5階ラウンジ

図4. 各会場の準備状況

3. 講演会

千代田区で学ぶ

サステナブルファッション

3.1 本企画の趣旨説明

研究代表者 村瀬 浩貴
共立女子大学 家政学部 被服学科

まず、冒頭で「千代田学」の取り組みを紹介したのちに、環境省や消費者庁の公開情報を用いて、ファッション産業がもたらす環境負荷の現状について説明した。例えば、図 6 の環境省資料を用いて、家庭から年間 48 万トンの衣類ゴミが排出されていること、衣類の 66%は処分・埋め立てとなっていることを説明した。その上で、消費者として実施できることの事例を消費者庁の資料（図 7）を用いて説明した。また、事前に参加者をお願いしていたアンケートの結果についても報告した（詳細は第 6 章にて述べる）。



図 5. 研究代表者 村瀬 浩貴

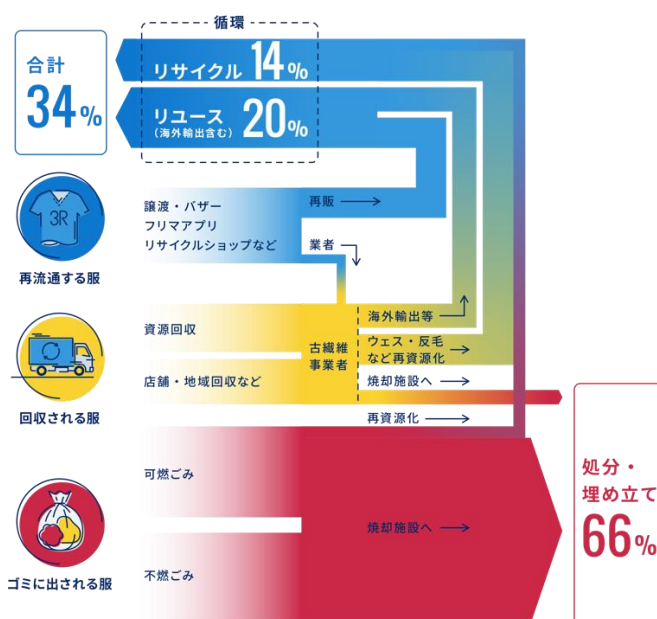


図 6. 環境省ホームページ

https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/



図 7. 消費者庁ホームページ

<https://www.ethical.caa.go.jp/sustainable/>

3.2 講演

地域性の復権による衣服の高付加価値化

山梨県立大学 地域人材養成センター

特任教授 増田 貴史 氏

増田氏より、地域で循環する産業構造の実現に向けた取り組みについてご紹介いただいた。以下に講演会の概要を記す。

本来によい衣服、豊かな衣服とは何か、ここではその答えの1つとして「衣服における地域性の復権」を考える。例えば石川県なら「兼六園桜で染めた加賀友禅を着て兼六園にお花見に行くこと」や、山梨県なら「甲州ブドウで染めたドレスを着てワインパーティーに参加すること」といった、衣服を介した地域性と体験の接続が今までの社会にはない豊かさや社会価値を実現する。つまり技術だけでは実現不可能な、その地域を支えてきた人・自然・文化・産業（例えば兼六園、加賀友禅、ブドウ栽培、山梨ワイン文化）があるからこそ成立する、その地域固有の豊かさを備えた衣服が生活を豊かにする。一方で環境面に着目をする、必然的に地域素材を用いた天然染料や天然繊維が好まれるため環境負荷の低いモノづくりに向かうことになる。大事なことは低環境負荷なことが豊かさに繋がるのではなく、地域の豊かさを備えた衣服を求めると低環境負荷なものが必要になる、ということである。

例えば、イタリアのブルネロクチネリというブランドでは、ニットが1着30万円もするが、公益性の高い活動をおこなっており、地元がそれを理解して購買につながっているという。このような取り組みは参考になると考える。増田氏自身も熊本県天草市で、林業廃棄物（間伐材）から紙を漉き、その紙から作製した木糸（もくいと）で服を作り販売するスタートアップを立ち上げた（株式会社サーキュライフ）。このスタートアップでは、服だけ

でなく、綿の栽培や牛の飼育など地域での様々な活動を行なっている。また、山梨県立大学での教育に関する話や、増田氏が開発した革新的草木染め染料のお話もいただいた。

日本における万博の歴史を振り返ると、1925年万博は工芸品、1974年万博はテクノロジーを主体としたものであり、その国が将来すすむべき道を示しているという指摘は興味深い。2025年の万博において前述の木糸製品が2025年万博のスタッフユニフォームに採用されたことは、私達の進むべき道を示唆していると強く感じた。



図8. 増田 貴史 山梨県立大学特任教授



図9. 増田氏の話をもとに真剣に聞く参加者

■質疑応答

参加者から増田氏への質疑応答がなされた。

Q1：石油と脱石油は二項対立なのか？

A：今回はわかりやすくするためにそのように表現したが、実際は石油化学の全てが悪い訳ではない。

Q2：千代田区のようなローカルな場でサーキュラーエコノミーを進めるヒントは？

A：従来の草木染めはどこか野暮ったかった。若い人の感性に響く物づくりが必要ではないか。

Q3：教育法についてアドバイスをいただきたい。

A：やる気を引き出すのは難しい。成功した人でも、本当にやりたいことで成功したのは2割と言われている。残りの8割はたまたま見つけたことで成功している。色々な可能性を提示してゆく必要があると考えている。



図 9. 講演の様子



図 10. 参加者からの質疑応答の様子

4. 展示

暮らしに役立つアップサイクルファッションの紹介

共立女子大学家政学部被服学科 教授
宮武 恵子

展示品の紹介に先立ち、宮武恵子教授から古着、日用品などから新たなファッションスタイルの提案や、アクセサリへのアップサイクル事例についてスライドを用いた説明をおこなった。その発想の原点となったのが、アフリカの農民の日常を切り取った写真集「FARM」である。アイディア豊かなボロ着に感銘を受けたことがこの取り組みのきっかけとなった。多くの家庭の箆笥に眠っている振袖を活かす新たなスタイルとして提案したものが「フリドレ」である。振袖と、使用されなくなったレンタルドレスを組み合わせた。



図 11. フリドレ作品例



図 12. 会場展示のフリドレ作品



図 13. 日用品からのアップサイクル例の実物を説明する宮武教授

さらに、廃棄寸前のジーンズ 20 トンを引き取った企業や、廃棄化粧品を画材に蘇らせた企業と協業したアップサイクル作品や、釣り糸など日用品からのアップサイクル事例についてスライドと実物での紹介を行った。

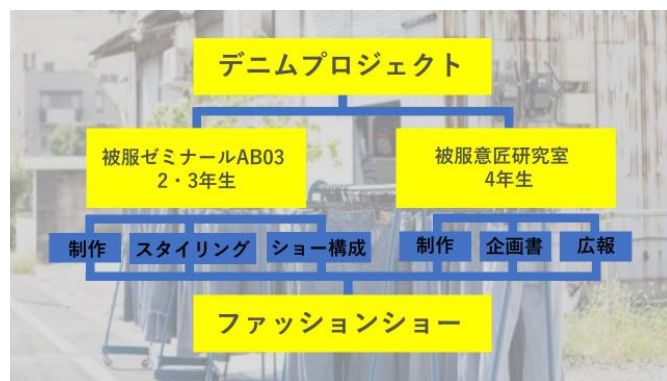


図 14. 共立女子大学でのアップサイクル活動事例



図 15. 廃棄デニム、捨て耳、化粧品再利用色材を活用したドレス作品例



図 16. 廃棄デニム、捨て耳、化粧品再利用色材を活用したドレス作品例

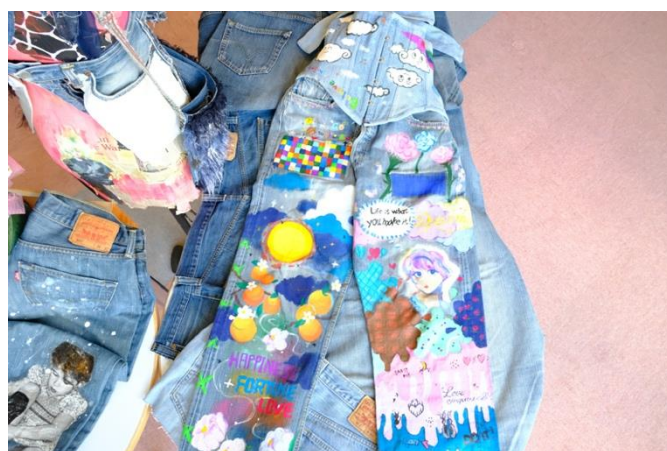


図 17. 古着、廃棄デニム、捨て耳、化粧品再利用色材を活用したシャツ作品例



図 18. 捨て耳を活かした作品例

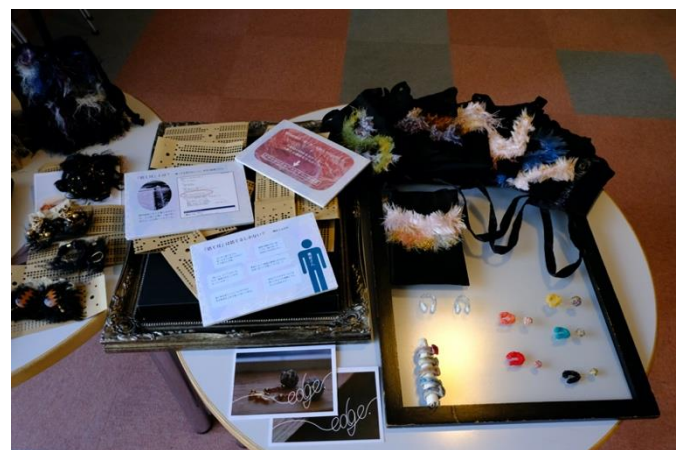


図 19. 捨て耳を活かしたアクセサリー・小物の作品例



図 20. 宮武教授による作品紹介の様子

5. ワークショップ

山梨県富士吉田市の織物産地で発生する端材を利用したアップサイクルのワークショップを行った。参加者は19名だった。

織物を織るときにその端部（耳）は切り取られて廃棄されてしまう。その「捨て耳」を用いてイヤリングとキーホルダーを作製した。



図 21. 捨て耳の例（実際には様々な色のものがある）



図 22. イヤリングの例



図 23. モケモケキーホルダー



図 24. ワークショップ会場の様子



図 25. キーホルダー製作

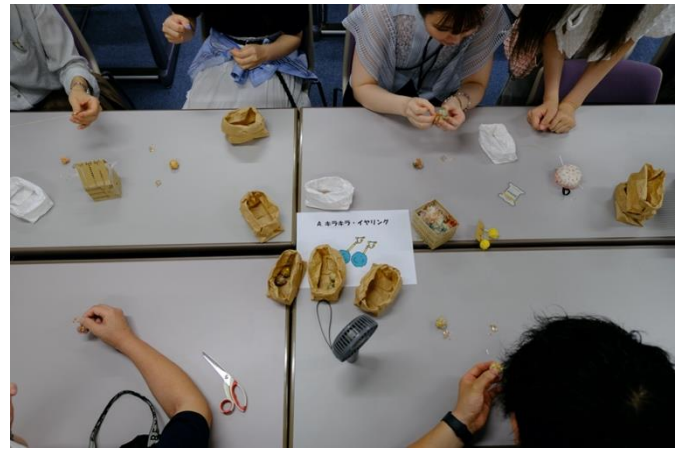


図 26. ワークショップの様子

6. アンケート分析

■事前アンケート

講演会・ワークショップの参加者に事前にアンケート調査を実施した。参加者のサステナブルファッションに関する知識および、実践状況に関する以下の質問を行った。

アンケートにご協力ください

Q1 サステナブルファッションについてどの程度の知識をお持ちですか？

☐ ほとんど何も知らない

☐ 新聞やネットの情報を受動的に得た程度

☐ 環境省、消費者庁や企業のホームページなどから積極的に情報を得ている

☐ 情報を得るだけでなく、サステナブルファッションを実践している

☐ その他...

サステナブルファッションに関して実践していることがあったら教えてください（複数選択可）

☐ 長く着ることができる服を選んでいる

☐ 古着を良く購入している

☐ フリマアプリなどを活用している

☐ 服のレンタルサービスを利用している

☐ マイクロプラスチックの流失を防ぐ洗濯ネットを使用している

☐ 直しやリペアで長く着る工夫をしている

☐ 家族や友人で服を着まわしている

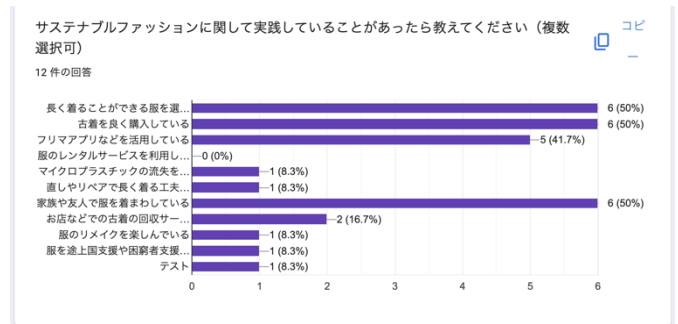
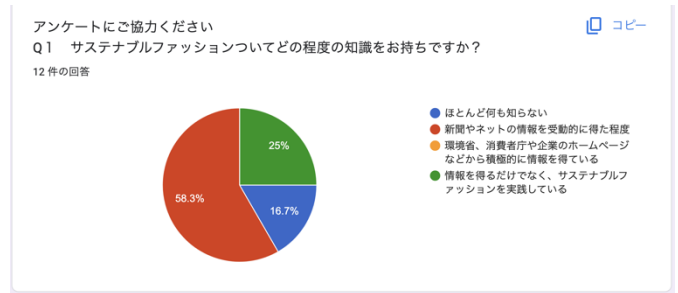
☐ お店などでの古着の回収サービスを利用したことがある

☐ 服のリメイクを楽しんでいる

☐ 服を途上国支援や困窮者支援の目的で寄付したことがある

☐ その他...

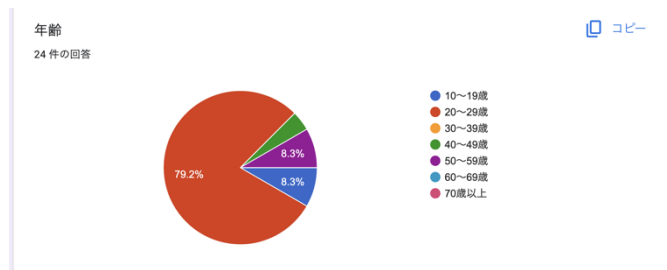
12名の参加者から回答が得られた。サステナブルファッションについて何も知らない参加者が2名(16.7%)だったのに対して、7名(58.3%)が何らかの知識を持っており、さらに3名(25%)が実際にサステナブルファッションを実践していた。回答者のほとんどが本学被服学科の学生であり、日頃から関連する情報に接する機会も多いことが伺われる。



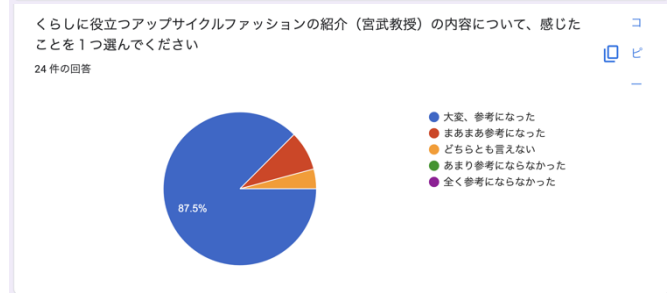
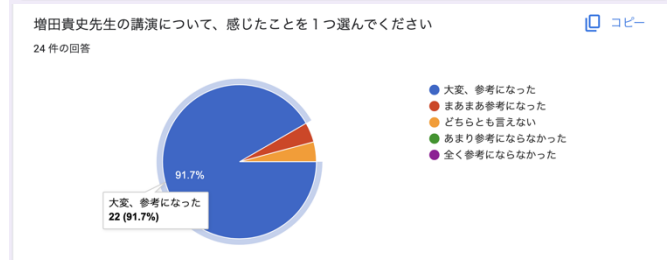
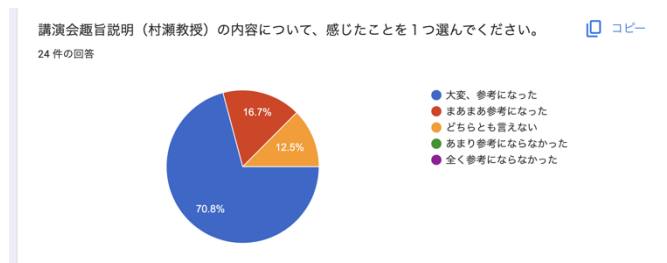
サステナブルファッションに関して実践していることは、「長く着ることができる服を選ぶ」、「古着の利用」、「家族や友人との着回し」、「フリマアプリの利用」は多くの参加者が行なっていることがわかった。一方、「マイクロプラスチックの流失抑制」、「直しやリペア」、「服のリメイク」、「途上国や困窮者支援」の実践は少なく、「レンタルサービスの利用」は0件だった。

■事後アンケート

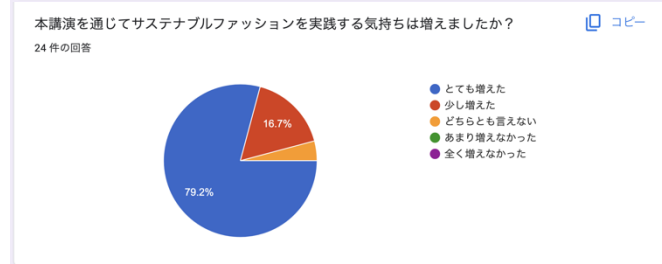
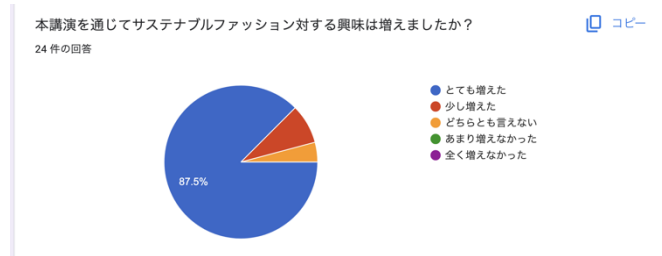
講演会、ワークショップの参加者に事後アンケートを実施した。24名の参加者から回答が得られた。回答者の年齢構成は以下である。



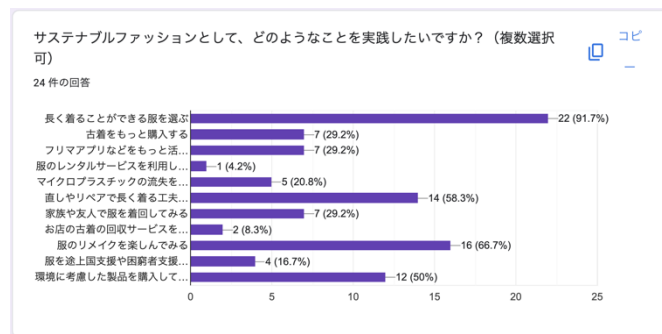
講演会・展示に関して、大いに参考になったことが伺える回答結果となった。



また、ほとんどの参加者が、本講演会に参加してサステナブルファッションに対する興味が増し、また実践する気持ちが芽生えたことがアンケート結果に示されている。



実践してみたい行動に関しては、ほとんどの項目で事前アンケートよりも回答比率が増加し、特に「長く着ることが出来る服を選ぶ」はほとんど全員が実践する意欲を持つようになった。本企画による啓蒙が有効であることが示された。





令和5年度 千代田学報告書
千代田区から発信するサステナブルファッションの
「自分ごと化」

2024年3月31日発行

発行者 共立女子大学 家政学部 被服学科